

# 株式会社ダイナックス（北海道）

～顧客のニーズを最優先し新技術の開発に挑戦、積極的に特許出願～

## 1. アメリカ企業との合併会社として創業、国内最大手のクラッチ板メーカーへ

（株）ダイナックスは、1973（昭和48）年、米国レイベスト・マンハッタン社（RM社）と（株）大金製作所の合併会社大金・アールエム（株）として創業、RM社とライセンス契約を結び、輸入した製品（湿式クラッチ板）の加工、販売を始めた。

しかし、国内自動車メーカーのニーズに合致した商品提供が難しかったことから、創業当初から自社製品の開発に取り組み、1983年（昭和58）年に国産摩擦材の第1号を開発。

この独自技術の開発成果を自社の経営基盤とすべく、また他社との競争力を確保するために特許を積極的に取得・活用することとなった。これを契機として、1987（昭和62）年にRM社とのライセンス契約を解消、次いで1989（平成元）年に合併契約も解消した。

一貫して自動車用クラッチ板の研究・開発を行ってきており、国内ではトヨタ自動車（株）、日産自動車（株）など自動車メーカー9社全て及び建産機器メーカー全てに商品を供給、海外でもフォード、GM、ダイムラークライスラー、ロールスロイス、ジャガー、ボルボ等へ納入しており、特にオートマチック車用クラッチ板に限定すると国内では約60%、海外では35%のシェアを持つ。

## 2. 顧客のニーズを最優先し、新たな技術の開発・改良に挑戦、それが特許へ

カーボン、不織布摩擦材等の新素材開発に関して2件の特許を取得。近年になってモジュール製品の開発が進み、実用化されたことに伴い出願件数が急増している。海外特許を平行して出願する場合も多いが、その場合はまずアメリカで権利化されてから日本でも審査請求を行うという方法を取っている。

初めての海外特許は昭和63年に出願したクロムメッキを施した湿式クラッチ用メーティングプレートである。クロムメッキの技術は従来からオートバイのブレーキには利用されていたが、加工費が高額であること等から自動車向け製品には使用されていなかった。ところが研究の結果、スチールの表面にクロムメッキ加工を施すと、摩擦による化学反応に対し安定であることが判明、製品化に踏み切ったものである。価格的には高額であることから非常に特殊な車種向けではあるが、需要が好評であったことから国内出願と併せてアメリカ、ドイツ、フランスへも出願し、登録。（ドイツは拒絶査定）

これ以降、同社では研究開発の成果は積極的に出願している。

## 3. 特許を生み出すから特許を活用するに発展。広い視野から特許を見つめる

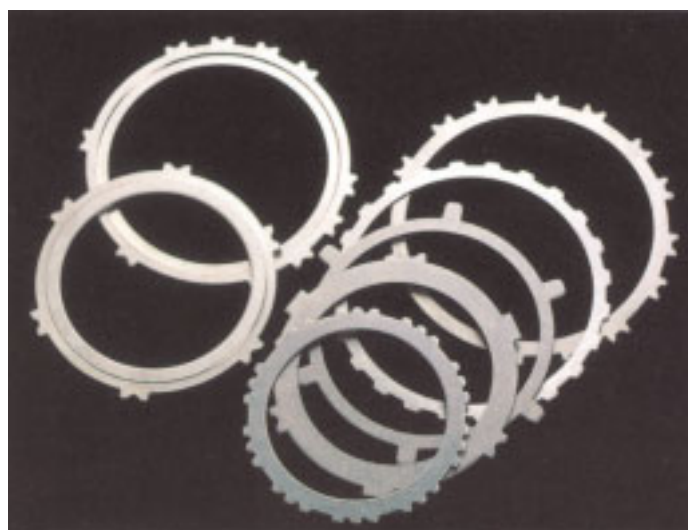
欧米市場への進出等海外へのシフトを背景として、特許等の権利関係については一層重要となっており、社内においても特許出願・取得の意識がますます高まっている。

また、自社製品材料の利用・活用の促進から、製品開発に当たって他社の開放特許の活用を検討するため、現在、特許流通アドバイザー等を活用して該当する技術情報の収集に努めている。

【特許活用製品】



クラッチディスク



プレート

●会社概要

代表者：代表取締役社長 正木 宏生

所在地：北海道千歳市上長都1053 - 2

創業：1973（昭和48）年

資本金：5億円

従業員：550名

主要製品：A T用クラッチ板